文化資源化する伝統芸能と中国:
芸能研究の情報収集・整理・発信の手引きとして

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34379

第２章　文化資源化する伝統芸能と中国
── 芸能研究の情報収集・整理・発信の手引きとして ──

上田　望

1. はじめに

本稿では、筆者がこれまで関わってきた中国の伝統芸能（主として演劇や語り物）について、どのようにして一次資料・二次資料から現地調査に必要な情報を収集し、更にまた現地調査で得た情報を整理し、発信していけばいいのか、個人的な体験に即して技術的な問題に絞り記すことにしたい。なお、伝統芸能に関する現地調査の手法については、「芸能調査の方法」（『テキスト 文化資源学』、金沢大学国際文化資源学研究センター、2011）に簡単な紹介があるので、そちらもご一読いただければと思う。

2. 中国の芸能を取り巻く環境

まず、中国の文化資源（伝統芸能）を取り巻く状況を少し説明しておきたい。中国では歴史的に芸能は政治と分かちがたく結びついている。紀元前一千年前にまで遡ることができる中国の民謡は、『詩経』と呼ばれる中国最古の詩歌集に採録されたが、これらの詩は「采詩の官」が民俗を知るために統治者の命を受けて各地に派遣され採集したものであるとも言われている。この「采風」の伝統はその後も綿綿と引き継がれ、中華民国時期に成立した北大歌謡研究会の活動などは、採集した歌謡を通じて民俗を知るという目的から言えば、その延長線上にあると言えよう。

また、今日においても「中国民間文化遺産搶救工程」（第一期：2003 年至 2007 年、第二期：2008 年至 2012 年）の下で行われている国家的な民間文化保護活動はその系譜に連なるものと言ってよかろう。同工程は、「中国民間文化遺産代表作リストを作成する」ことや、「ユネスコの“人類の無形文化遺産の代表的な一覧表”へ申請、登録を目指す」ことを明確に目標として掲げており、目標達成に向け、中国はまさに国を挙げて邁進している。現在、中国の無形文化遺産保護の旗振り役は文化部、芸術研究院、そして 2006 年 9 月に芸術研究院の下に設立された中国非物質文化遺産センターの三つの機関であるが、文化部は地方から上げられた情報を元に「国家級非物質文化遺産リスト」を作成している。

2006 年 6 月　「第一批国家級非物質文化遺産リスト」（518 項目）を公布。
2008 年 6 月　「第二批国家級非物質文化遺産リスト」（510 項目）および「第一批国家級非物質文化遺産拡展項目リスト」（147 項目）を公布。
2011 年 5 月　「第三批国家級非物質文化遺産リスト」（191 項目)を公布。

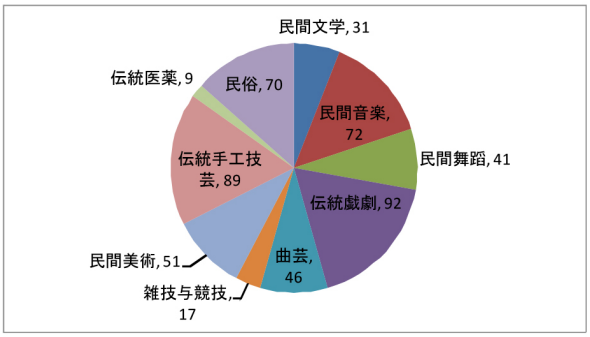

図 1　ジャンル別にみた第一批国家級非物質文化遺産リスト（518 項目）

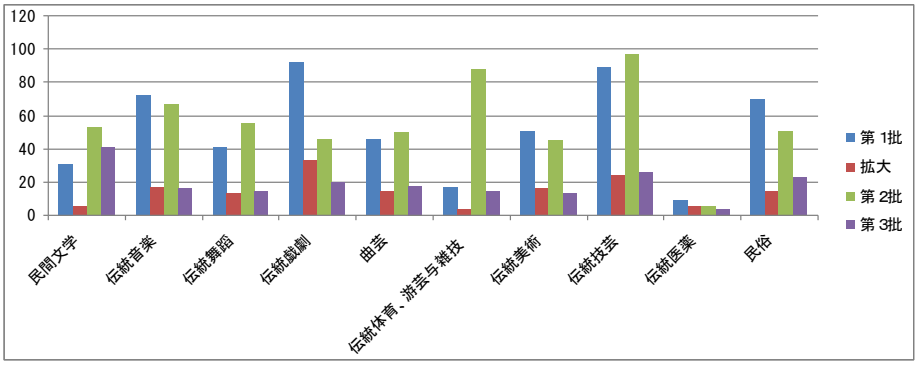

図 2　ジャンル別にみた国家級非物質文化遺産リスト（第一批～第三批）

演劇（中国語で「戯劇」）に関して言えば、第一批で世界的に知名度の高い昆曲、京劇、越劇から中国の人でも殆ど観たことがない梨園戯、甫仙戯、目連戯、儺戯、安順地戯などマイナージャンルに至るまで 92 種類をリストアップしており、語り物（曲芸）も 46 種類とかなり多く、演劇と語り物でリストの四分の一を占めている。その反動か、特に演劇は第二批以降、相対的に比率が下がっているが、後述するように『中国戯曲志』には 394 種類しか演劇のジャンルが記述されておらず、演劇が第二批以降、多少尻すぼみになったのはやむを得ないであろう。

145Ⅳ－1昆曲　146Ⅳ－2梨园戏　147Ⅳ－3莆仙戏　148Ⅳ－4潮剧　149Ⅳ－5弋阳腔　150Ⅳ－6青阳腔　151Ⅳ－7高腔　152Ⅳ－8新昌调腔　153Ⅳ－9宁海平调　154Ⅳ－10永安大腔戏　155Ⅳ－11四平戏　156Ⅳ－12川剧　157Ⅳ－13湘剧　158Ⅳ－14广昌孟戏　159Ⅳ－15正字戏　160Ⅳ－16秦腔　161Ⅳ－17汉调桄桄　162Ⅳ－18晋剧　163Ⅳ－19蒲州梆子 164Ⅳ－20北路梆子　165Ⅳ－21上党梆子　166Ⅳ－22河北梆子　167Ⅳ－23豫剧　168Ⅳ－24宛梆　169Ⅳ－25怀梆　170Ⅳ－26大平调　171Ⅳ－27越调　172Ⅳ－28京剧　173Ⅳ－29徽剧　174Ⅳ－30汉剧　175Ⅳ－31汉调二簧　176Ⅳ－32泰宁梅林戏　177Ⅳ－33闽西汉剧 178Ⅳ－34巴陵戏　179Ⅳ－35荆河戏　180Ⅳ－36粤剧　181Ⅳ－37桂剧　182Ⅳ－38宜黄戏 183Ⅳ－39乱弹　184Ⅳ－40石家庄丝弦　185Ⅳ－41雁北耍孩儿　186Ⅳ－42灵丘罗罗腔 187Ⅳ－43柳子戏　188Ⅳ－44大弦戏　189Ⅳ－45闽剧　190Ⅳ－46寿宁北路戏　191Ⅳ－47西秦戏　192Ⅳ－48高甲戏　193Ⅳ－49碗碗腔　194Ⅳ－50四平调　195Ⅳ－51评剧　196Ⅳ－52武安平调落子　197Ⅳ－53越剧　198Ⅳ－54沪剧　199Ⅳ－55苏剧　200Ⅳ－56扬剧 201Ⅳ－57庐剧　202Ⅳ－58楚剧　203Ⅳ－59荆州花鼓戏　204Ⅳ－60黄梅戏　205Ⅳ－61商洛花鼓　206Ⅳ－62泗州戏　207Ⅳ－63柳琴戏　208Ⅳ－64歌仔戏　209Ⅳ－65采茶戏　210Ⅳ－66五音戏　211Ⅳ－67茂腔　212Ⅳ－68曲剧　213Ⅳ－69曲子戏　214Ⅳ－70秧歌戏 215Ⅳ－71道情戏　216Ⅳ－72哈哈腔　217Ⅳ－73二人台　218Ⅳ－74白字戏　219Ⅳ－75花朝戏　220Ⅳ－76彩调　221Ⅳ－77灯戏　222Ⅳ－78花灯戏　223Ⅳ－79一勾勾　224Ⅳ－80藏戏　225Ⅳ－81山南门巴戏 226Ⅳ－82壮剧　227Ⅳ－83侗戏　228Ⅳ－84布依戏　229Ⅳ－85彝族撮泰吉　230Ⅳ－86傣剧　231Ⅳ－87目连戏　232Ⅳ－88锣鼓杂戏　233Ⅳ－89傩戏 234Ⅳ－90安顺地戏　235Ⅳ－91皮影戏　236Ⅳ－92木偶戏

表１　第一批国家級非物質文化遺産リストの伝統戯劇（92 項目）

このような中国の文化遺産に対する精力的な取り組みのメリットとしては、網羅的な全国調査が実施されることによって、これまで未知の存在だった民間文化にスポットがあたり、記録の整備と保存が行われているということがまず挙げられる。具体例については後述するが、中央から、各省の文化庁、市・県の文化局・群衆芸術館、そして鎮にある文化站に至るまで多くの機関が調査に関わって、地域によっては驚くほど詳細な報告が作られ始めている。一方、こうした活動のデメリットとしては、国家によって各種の伝統芸能がランク付けされ、芸能本来の持つ価値とは別のところから選別化が進められていることが懸念される。折しも中国は改革開放が進む中で、一部を除いて多くの伝統芸能集団は政府の援助無しに自立してやっていくことを求められており、政治的・商業的な活動に走り、観光資源化することで芸能自体も変容し始めている（観光資源化することが必ずしも悪い訳ではないが）。

中国は 2009 年 6 月 13 日を「文化遺産日」に制定し、無形文化遺産保護活動の指導方針として、保護と第一とし合理的利用と発展継承を謳っている。ここからも中国の無形文化遺産に対する「本気度」を読み取ることができる。政府主導による強力な調査保護活動は今後も続いていくとみてよいであろう。

3. 情報収集に向けての準備

さて本題である。広大な中国にはどのくらいの伝統芸能が存在するのであろうか。各地域で使われている方言に対応して、それぞれの地域に独特の演劇や語り物が伝承されており、例えば演劇についても地方色豊かな演劇、所謂「地方劇」は五百以上のジャンルがあると言われている。それらの一つについて現地調査を実施しようとする

だけでも、アクセスや言語の問題があり容易なことではない。筆者はだいたい以下の手順で必要な情報を集めることにしている。

1）文献（伝統芸能誌・脚本）による事前調査

中国の演劇や語り物について概括的な知識を得るには以下の叢書が便利である。

・『中国戯曲志』（30 部省巻、文化芸術出版社、1990-1999、参考資料の下限は海南巻を除き 1982 年まで）
・『中国曲芸志』（30 部省巻、新華出版社、1992-?）
・『中国戯曲音楽集成』（30 部省巻、文化芸術出版社、1992-?、参考資料の下限は 1985 年まで）
・『中国曲芸音楽集成』（29 部省巻、新華出版社、1992-2005?）

がある。

なお、中国には以上の 4 種類に、『中国民間歌曲集成』、『中国民族民間器楽曲集成』、『中国民族民間舞蹈集成』、『中国民間故事集成』、『中国歌謡集成』、『中国諺語集成』を加えた 10 種類の「民族文芸集成志書」というシリーズがあるので、中国の民謡や民族音楽、民間説話、諺などについて調べる際には参考にしていただきたい。

さてこれらの中で、『中国戯曲志』は中国各地の 394 種類の演劇ジャンル、演出場所 1832 地点、戯曲文物・遺跡 730 個所、演劇関係者 4220 名の伝記等を紹介しており、中国の演劇について網羅的に理解しようとすれば、『中国戯曲志』を超えるものは現在も作られていない。ただ、行政区分による分巻制で編集・刊行されたことにより、行政区分を超えて広がる演劇の実態が正確に把握されていないなどの問題があることは既に指摘されている。また、編纂時に参考にした収録資料の下限が 1985 年と四半世紀以上も前であり、中国社会の急激な変化と研究の進展に伴って、情報が若干古くなっている点は否めない。こうした問題は『中国曲芸志』、『中国戯曲音楽集成』、『中国曲芸音楽集成』などにもある程度共通するものである。なお、これらは演劇や語り物の脚本・唱本の一節を抜粋して楽譜と一緒に掲載しているだけであり、作品自体を読むためには別の文献資料を探す必要がある。

演劇のテキストに関しては、中国各省の代表的な演劇ジャンルの作品を集めた『中国地方戯曲集成』13 巻（中国戯劇出版社、1959-1963）がある。そのほか、各省ごとの地方劇の脚本集、演劇ジャンルごとの脚本集も種々刊行されており、まずは具体的な調査対象（演劇ジャンル・地域など）を決めてこれらの脚本を探し、ある程度事前に学習しておくほうがよい。なぜかと言えば、最近でこそ農村部で上映される芝居に字幕が投影されることもあるが、通常は演目が黒板に書かれているくらいで（右ページの図 3 を参照）、方言によるアドリブで演じられるパートも多いだけに、演目からある程度内容が推察できなければ理解に困難を極める調査となるからである。

地方（省）ごとに刊行されている脚本集については、膨大な量になるため列挙しな

いが、例えば山西省には、蒲劇、北路梆子、上党梆子など五十以上の演劇のジャンルがあり、その脚本集としては、『山西地方戯曲匯編』（1-19 集、山西人民出版社、1981-?）などを参照すればよい。同じように湖南省であれば『湖南地方戯曲叢刊』（1-19 集、湖南人民出版社、1956-1957）、湖北省であれば『湖北地方戯曲叢刊』（1-89 集、湖北人民出版社・湖北省芸術研究所、1959-2000）など、整理された多くの脚本集が刊行されている。これらの脚本集の多くは内部発行のため、かつては外国人が閲覧することは難しかったが、今日では比較的容易に目にすることができる。演劇ジャンルごとの脚本も同様に、各ジャンルごとに整理された脚本集を探せばよい。京劇のように有名なものであれば京劇の脚本だけを集めた書籍がいくつも出ている。例えば、『京劇大観』（6 冊、宝文堂書店、1958）や『京劇叢刊』（36 冊、新文芸出版社・中国戯劇出版社、1953-1958）、臺湾の『國劇集成』（15 冊、國防部總政治作戰部振興國劇研究發展委員會、1969-1974）などである。一方、マイナーなジャンルについては、読者側の需要もあまりないことから脚本が単行本として刊行されることは稀であり、『関索戯志』（文化芸術出版社、1992）などのように研究書に脚本が附録として載せてある場合が多い。

図３　越劇の演目「望子成龍」の掲示

以上、演劇の脚本の探し方について述べたが、語り物についてもほぼ同様である。省別の語り物専門の刊行物は戯曲に比べて圧倒的に少なく、浙江省の『浙江曲芸叢刊』（中国曲芸家協会浙江分会・浙江省芸術研究所、1981- ）のように定期的に語り物が整理されて出版される地域は多くない。しかしながら、ジャンルごとの専集の唱本選は、意外にたくさん刊行されている。例えば、弾詞説唱類では『中国古典講唱文学叢書』12 種類（中州古籍出版社、1982-1991）、宝巻では『宝巻初集』40 冊（山西人民出版社、1994）、鼓詞であれば『鼓詞彙集』4 冊（瀋陽市文学芸術工作者聯合会編、1957 初刊）、子弟書なら『子弟書集』2 冊（江蘇古籍出版社、1993）、相声なら『中国伝統相声大全』4 冊（文化芸術出版社、1993）、評書評話類も多くの出版社が競って活字本を出している。演劇・語り物の細分化されたジャンルを超えた大型の脚本・唱本コレクションとしては以下の二つが代表的なものである。

・『清蒙古車王府藏曲本』315 函 1661 冊（北京古籍出版社、1991）、後に『清車王府藏曲本』57 冊（学苑出版社、2001）として縮印発行。
・『俗文学叢刊』全 5 輯 500 冊（臺湾新文豐出版公司、2001-）

これらの書籍は中華民国以前の古い版本をそのまま影印あるいは校訂し活字にし

たものか、現在上演されているものを文字に起こして整理し読み物にしたものである。

2）文献（現地調査報告）による事前調査

次に現地調査報告の文献資料について簡単に述べておきたい。

本格的な中国農村部での現地調査は、1980 年代以前はプロレタリア文化大革命など政治的混乱の影響もあり、殆ど行われていなかった。また、祭祀儀礼や宗族と関わりがあるプリミティブな演劇は、迷信と批判を受けるため上演ができない時期が長かったということも大きい。しかし改革開放によって演劇調査にも雪解けの季節が訪れる。「中国における演劇の発生と展開」を研究テーマにしていた田仲一成氏は、1970 年代から 80 年代にかけてはシンガポールや香港などで現地調査を実施し、『中国祭祀演劇研究』（東京大学出版会、1981）、『中国の宗族と演劇』（東京大学出版会、1985）、『中国郷村祭祀研究』（東京大学出版会、1989）などの大著を発表したが、1989 年に初めて中国大陸（湖南省懐化市）で現地調査を実施する。同氏はその後も継続的に大陸での調査を行い、その成果は、『中国巫系演劇研究』（東京大学出版会、1993）、『中国演劇史』（東京大学出版会、1998）、『中国地方戯曲研究』（汲古書院、2007）などのかたちで公表されている。

現地において周囲の環境を含め上演の記録を精密に作成し、脚本など関連する文献資料を徹底的に記録・収集する同氏の調査方法は、中国内外の研究者に大きな衝撃を与えた。例えば、台湾の王秋桂氏が中心になって進めた中国での民俗（主として祭祀と演劇）調査の報告書は、『民俗曲芸叢書』80 種（1993-2000）として刊行されるが、これは田仲氏の調査方法を手本に人海戦術で膨大な地域を調査した成果物であり、その中には儺戯など多くの珍しい演劇の上演記録や脚本が含まれている。上記の先行研究の中に調査予定地に関する報告が含まれているのであれば、事前に目を通しておかねばならない。筆者自身、江蘇、浙江、貴州などではこれらの報告書のコピーをガイドブックを兼ねて携行し、また現地で著者にお目にかかって直接教えを請うたこともある。また中国側にとっても、海外の研究者と問題意識を共有しながら、地元の研究者たちが殆どの地域の調査を担当したことで、中国の新しい演劇研究に方法論において大きな示唆を与えるとともに、中国国内でもあまり知られていない土俗的な伝統芸能や祭祀儀礼の存在を世に知らしめることにもなった。

田仲氏の研究や『民俗曲芸叢書』を除き、現在では特定地域の個別的な調査研究や報告はかなり蓄積されてきているが、単行本として刊行されることもあれば、ローカルな民俗研究の雑誌や演劇研究の雑誌に論考が紹介されることもあり、資料収集で見落としがないよう注意が必要である。ただ、以前であれば、江蘇一帯の民俗調査なら、『民間文芸季刊』（後に『民間文化研究』）、山西省の演劇なら『中華戯曲』、中国の演劇を主とした無形文化一般なら『文化遺産』などいろいろな定期刊行物をチェックする必要があったが、現在では「中国知網」（CNKI）という論文検索データベースを利

用して簡単にアクセスできる。著作権の問題を別にすれば、中国は IT インフラの整備が進んでおり、学術論文や原典資料のデータベース構築は日本よりも先を行っているかもしれない。

また、前述のユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」への申請・登録との関わりで、省や市・県の各レベルで伝統芸能を含む無形文化遺産の調査を積極的に推し進めている地域がある。例えば浙江省寧波市では、ローカルな演劇や語り物の調査に力を入れており、語り物に関して言えば、寧波市独自で『寧波曲芸志』（寧波出版社、1998）を刊行するのみならず、唱本を整理した『寧波伝統曲芸作品精選』3 冊（寧波出版社、2006）なども相次いで出版している。現地に行かないと買うことが難しい書籍も多いのであるが、的確な情報を前もってつかむことができれば、ある程度効率的に調査できること間違い無しである。

3）マスメディアからの上演情報、上演者・主催者からの上演情報の収集

市や県、あるいは鎮レベルで行われる大規模な公演については、日程などが前もって新聞や雑誌などに掲載されることも多い。地方の新聞やそのネット版などに上演予定や劇団の紹介記事など様々な情報が載っていることがあるので、定期的なチェックは欠かせない。そのほか、上演終了後にも記事として上演の様子などが紹介されることも少なくなく、仮にその日に現地に行けなくても、何がどこでいつ上演されたのか、次回はいつどこで上演されるのか、などの手がかりを得られることがある。

また、上演者・主催者から直接教えてもらうという方法もある。上演する劇団の役者や語り物の上演者に電話などで直接、連絡を取り、上演地点を前もって聞き出すことができれば、空振り無しで確実な調査ができる。演劇は最近でこそ年中上演される地域も増えてきたが、伝統的に元宵節（旧暦 1 月 15 日の夜）前後や廟の祭りなどの時に行われることが多く（下の図 4 は寧波市の趙君廟で象山万花越劇団が演じた「三蓋衣」）、何ヶ月も前からいつどこでやるか予定が入っている。また、劇団は一日あたりの謝金が高いことから 2、3 日から一週間くらいで移動を繰り返すが、語り物の場合には一ヶ月以上も場所を固定して上演を続ける場合がある。

図 4　越劇の野外公演

こうした情報交換ができるようになるまでの人間関係を築き上げるためには、何回か調査をして顔見知りになるか、現地の人の紹介を通すしかない。いずれにせよ、事前に十分な情報収集をして

現地に行き、現地で運良くお目当ての伝統芸能の上演に巡り会うことができれば、劇団や上演者、主催者とコミュニケーションを図り、また新たな情報を集めて次の調査につなげることができる。運悪く空振りだったら、それはそれでまた現地の人と交流しながら、「甬劇だったら、来月、咸祥廟に来るよ」というような情報を得て、次につなげていくしかないのである。

ところで最近、劇団や上演者とコンタクトを取るために役に立ついくつかの便利な資料が出てきた。以前は、どこにどんな劇団や上演者が住んでいるかという情報は、現地の文化局では把握していても外部の人間、特に外国人にはおいそれとは教えてくれなかった。しかし、ユネスコのリストへの登録を目指す過程でいろいろと調べ上げた情報が公開されるようになってきた。例えば、2007 年から寧波市全域で芸能伝承者や芸能ジャンルについてローラー作戦で調査が実施され、その調査票を整理し出版したのが『甬上風物』（寧波出版社、2008）というシリーズである。寧波市の区や寧波市の下に位置する県級市ごとに分かれており、鄞州区だけでも 20 冊と膨大な分量になる。もともとの調査票は、無形文化遺産伝承者の氏名、年齢から連絡先に至るまで個人情報の塊であるが、この報告書ではそれをそのまま載せており、「本当にこれでいいのかな？」と心配になりつつも、現地に行く身としては有益な情報が満載であり、大変ありがたい報告書である。

また、中国の文化部は「中国文化市場網」という HP を立ち上げており、数年前からその中で「全国営業性演出単位和個人信息公示」というかたちで、各省ごとに文化局に登録されている劇団や個人の芸能上演者、マネージャーなどの名前や登録番号などを公開している。例えば浙江省を例に取ると、2009 年 3 月 27 日アクセス時点では、浙江省全体で 230 の芸能団体が登録されており、そのうち名前から劇団と思われる団体は 168 もある。ここに挙がっていない劇団や個人営業の芸人もたくさんいるが、いずれにせよ、これからはこうして事前に精度の高い情報を入手することが可能となり、必然的に現地調査で収集できる資料の質と量も向上していくことであろう。

4. 情報の整理と発信

現地で入手できた伝統芸能に関する各種の資料はどのように整理したらよいのであろうか。文献資料、画像・映像資料とに分けて説明したい。

1）文献資料の整理

伝統芸能の現地調査において、何よりも目指すべきは脚本・唱本などの文字テキストである。もちろん、これ以外にも族譜や廟の来歴などを記した石碑などの歴史資料、現地で貰った名刺から帳簿など多岐にわたるが、メジャーな演目であれば、脚本を比べることでテキストの成立過程、主催団体の嗜好や属性などいろいろなことが見えて

くるため、丁寧にお願いをして脚本・唱本の撮影や複製を許可してもらう（右の図 5 は江蘇省如皋に伝承される童子戯の手書きの脚本）。また、全く脚本などを持たない劇団や上演者も存在する。最近では字幕投影用に脚本を電子データで管理している劇団も珍しくない。次にこれらの画像資料をもとに、ワードなどで電子文書化する。もちろん自分でやれればいいのであるが、時間的余裕がない場合には外部に委託することも可能であり、現在、中国にはこうした古典文献の入力と整理を専門に行う業者が存在する。ただし問題はここからであり、伝統芸能の脚本などでは誤字・俗字が散見され、方言語彙も混じるために緻密な校勘が欠かせない。また、中国語のデータを扱う場合には、簡体字・繁体字・ユニコードなど文字コードをどうするかという問題があり、英語などと違って世界共通のコーパスを作成する際にネックとなる。

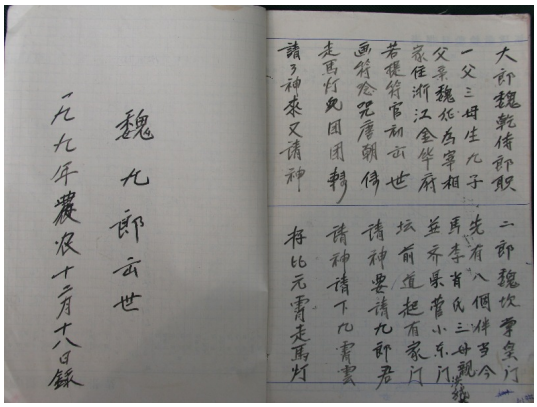

図 5　江蘇省如皋に伝わる手書きの脚本

筆者の場合は、後で統計処理など行う都合上、原本の通りに入力したテキストとは別に、繁体字で統一・整理したデータを作成することにしている。伝統芸能文献の電子化作業やテキストを検索できるシステムの開発については、演劇や語り物は小説に比べて十年以上遅れている。現在、ネット上で利用できる検索システムとしては、王順隆氏が作成した臺湾中央研究院の「閩南語俗曲唱本「歌仔冊」全文資料庫」がある程度である。ただ、最近になって中国の愛如生數字化技術研究中心という会社が、『民間故事寶卷』（40 種 63 巻）、『明成化説唱集』（16 種 17 巻）、『清四大彈詞』（4 種 106 回）や各種の戯曲作品の USB フラッシュメモリ型データベースを開発販売し始めるなど、少しずつではあるが電子化が進んでいる。中国古典小説は、基本文献に関しては電子化と整理がほぼおわり、この十年で電子コーパスを利用した計量的研究など新しい研究が出てきており、伝統芸能も周回遅れではあるが、戯曲、語り物の順で小説研究の後ろを追いかけてコーパスを構築していくことになるであろう。

2）画像資料の整理

画像資料を、静止画の写真とビデオカメラで個人で撮影した動画資料、市販されている VCD、DVD などの動画資料とに分けて、整理の方法について私見を述べたい。

現地で撮影した上演風景の写真や、脚本などの文献資料の写真をきちんとバックアップを取り保存しておくことは言うまでもないが、問題はどのように活用するかということである。肖像権・著作権の問題がクリアされれば、こうした貴重な画像データ

も積極的に公開、活用していくというのが時代の趨勢のように見える。例えば、日本国内を例に取ると、東京大学東洋文化研究所が長澤規矩也氏旧蔵書の雙紅堂文庫蔵書に含まれる膨大な唱本を全文影像公開データベースとして2006年から公開している。また、早稲田大学は「古典籍総合データベース」で澤田瑞穂氏旧蔵書の「風陵文庫」から宝巻やその他の口唱文芸の画像を選び公開している。これらは今後、画像資料をウェッブ上で公開する際の一つのモデルケースとなるであろう。

では動画データはどうすればよいであろうか。最近の撮影機材の進歩はめざましく、ビデオテープなど使わずとも最初から HDD や SD カードに電子データとして記録保存できる。IC レコーダもまたしかりである。動画や音声のデータについては、撮影（録音）場所、撮影（録音）時間、上演者に関する情報、演目などを整理して保管しておくのはもちろんであるが、珍しい映像であればサーバー上で公開し、情報を共有するというのも一つの考え方であろう（自分では聴きとれない方言音の歌詞でも、それをネイティブが視聴して後から教えてくれないとも限らない）。現地で撮影した伝統芸能の映像をネットで公開している例としては、財団法人東洋文庫所蔵動画データベースでストリーミング配信されている、田仲一成氏撮影の中国演劇と動画が挙げられる。

また、中国国内で販売されている各種伝統芸能の VCD、DVD、MP3 なども立派な研究資料となり得る。演劇に関しては歌唱部分に中国語の字幕が付いている作品が多く、そこだけを抽出すれば脚本の文献資料ともなり得る。地方の演劇や語り物については、方言音で演じられるがゆえに、その方言が使われている土地に行かないと入手できないものが多く、これも立派な現地調査による資料収集である（道ばたで売られていたりする）。集めた VCD、DVD などについても、資料が増えるほどきちんとした管理が必要であり、ジャンルや劇団、上演者などの情報を表計算ソフトなどできちんと整理しておくべきである。

中国全体で市販されている伝統芸能の映像資料がいったいどれくらいあるのか、正確な統計や記録がないのが残念であるが、これらを研究資料としてきちん活用できるようにと、早稲田大学演劇博物館や金沢大学日中無形文化遺産プロジェクトでは、それぞれ独自に映像（AV）資料データベースを公開している。

5. おわりにかえて

以上で見てきたように、今日、既出既存の中国伝統芸能の基本文献資料は多くが出版されている。次のステップとして、これからはデジタルアーカイブ化が進み、文献資料の画像やテキストデータを誰もが簡単に自宅から利用できる時代になっていくであろう。

これはもはや不可逆的な流れと言ってもよく、中国での調査を通じて収集した伝統芸能の文献資料や映像資料も、いずれは個々の研究者、好事家や研究機関の努力によ

って同じ道を歩むことになろう。芸能は本来「一回性」のものであり、筆者の少ない経験でも全く同じステージを、二回観たり聴いたりしたということはない。だからこそ、その「一回性」の複製資料を公開し、広く情報を共有することには、保存や活用（学問の発展や新しい作品の創出など）という観点からも意味があると考えられる。

そしてもう一つ言えることは、これからの中国伝統芸能の新資料は、図書館ではなく現地でしか見つけられないということである。もちろん、これは物理的な資料の発見・発掘ということであり、そびえ立つ膨大な資料と格闘し、それらをどう読み解くかということはまた違う次元の問題である。情報が不足し、制約が多かった改革開放以前とは別の意味で伝統芸能の調査がやりにくい時代になったが、ささやかな経験に基づく駄文が、これから中国で現地調査を行う読者諸賢の一助となれば幸いである。

参考文献

笠井直美「漢字の処理と中国語コーパス」（藤村逸子・滝沢直宏編『言語研究の技法』ひつじ書房、2011、pp. 301-327）

田仲一成・小南一郎・斯波義信編『中国近世文芸論』（東方書店、2009）